弘前大学教育学部紀要　第114号：87～95（2015年10月）
Bull. Fac. Educ. Hirosaki Univ. 114：87～95（Oct. 2015）

中学校家庭科教員免許状保有教員と臨時免許状教員に指導された生徒の家庭科観

Junior High School Students' Perspective on Home Economics Education: A Comparison between the students taught by a teacher with the educational personnel certificate of Home Economics Education（EPCH）and the students taught by a teacher without EPCH

日景　弥生*、青木香保里**、志村　結美***
Yayoi HIKAGE*, Kahori AOKI**, Yumi SHIMURA***

要　旨

中学校において家庭科を指導する教員は、臨時免許状教員が多い。そこで、本研究では臨免教員の指導は学習者にどのような影響を与えているのかを検討するために、保有教員と臨免教員に指導されている学習者を対象に学習効果や家庭科観などについて調査し、両校の生徒の実態を明らかにすることを目的とした。

その結果、保有教員指導校の生徒の知識や技術は、臨時免許状教員指導校の生徒よりも優位に高率だった。また、臨時免許状教員指導校の生徒は、家庭科は知識や技能を習得する教科であると捉えているが、保有教員指導校の生徒は課題解決や意思決定の力を身に付ける教科と捉えていることがわかった。

この相違には、指導者の家庭科教員免許状の有無が関連すると推察される。生徒の学習を保障するためには、臨時免許状教員に対するサポート体制の整備等や教員免許制度そのものの改善が必要と考える。

キーワード：家庭科教員免許、中学生、家庭科観

1．緒言

中学校や高等学校の教科指導は、教育職員免許法などから教科の免許状取得者が担当すべきであるが、中学校技術・家庭科（家庭分野）（以下、中学校家庭科）を指導する教員には普通免許状ではなく臨時免許状による教員（以下、臨免教員）の割合が高い。菊地[1)]は、それまで男女別に学習していた中学校技術・家庭科が「相互乗り入れ」に移行する際に高知県内の実態調査を行い、小規模校には家庭科担当教員が少なく、臨免教員は38％いることを30年前に指摘した。日本家庭科教育学会が行った47都道府県を対象とした調査[2)]によれば、中学校家庭科を指導している臨免教員は平均22.1％であるが、５割や４割を超える調査地があることや、常勤講師では家庭科免許なしの教員が７割や６割を超える調査地があり、調査地により違いがあるとしている。さらに、著者らが行った青森県内の中学校家庭科担当教員を対象とした調査（未発表データ）では、臨免教員の割合は57.1％であり、免許保有教員（以下、保有教員）より臨免教員が多いことが分かっている。

浜島[3)]は、47都道府県の指導主事を対象に調査を行い、回答の得られた25道県の結果から臨免教員は学校規模と関連があり、小規模校が多く存在するほど臨免教員の割合は増加し、９学級以下の小規模校における臨免教員の割合の平均は42.7％であることや、臨

＊　弘前大学教育学部家政教育講座
Department of Home Economics Education, Faculty of Education, Hirosaki University
＊＊　愛知教育大学教育学部家政教育講座
Department of Home Economics Education, Faculty of Education, Aichi University of Education
＊＊＊　山梨大学大学院教育人間科学域教育学系
Division of Education, Faculty of Education and Human Sciences, Graduate School, University of Yamanashi

免教員の家庭科指導上の問題点として「技術指導能力に欠ける」「家庭科教育の意義や重要性をわからせることができない」などを明らかにしている。加えて、浜島[4]は、臨免教員は家庭科に対する意識は消極的、拒否的態度の者が多く、それは保有教員の約2.6倍であることや、臨免教員自身の力量や指導上の初歩的な問題に困難やゆきづまりを感じていると報告している。

このように、中学校家庭科における臨免教員の存在が拡大化・深刻化している現状では、学習者への影響が懸念されるが、そのような報告はみあたらない。そこで、本研究では臨免教員の指導は学習者にどのような影響を与えているのかを検討するために、保有教員と臨免教員に指導されている学習者を対象に学習効果や家庭科観などについて調査し、両校の生徒の実態を明らかにすることを目的とした。

２．方法

（１）調査対象および調査時期

調査は、ある県内の保有教員が指導するＡ中学校３年生124名（男子71名、女子53名で４クラス編成）と、臨免教員が指導するＢ中学校３年生37名（男子20名、女子17名で１クラス編成）を対象とし、中学校家庭科の学習がほぼ終了している2013年12月に実施した。有効回収率は100％だった。対象校がそれぞれ１校であることや対象者数に違いがあることは、臨免教員が指導する生徒や学校への調査は了解が得られにくいこと、了解が得られても臨免教員が指導している学校の多くは、生徒数が数名から10名程度であること、複数の学校に調査を依頼し対象者数を増やすことは可能であるが、それにより学校間の差が大きくなることなどから、臨免教員指導校の中で比較的生徒数の多い学校に依頼した。また、生徒の生活環境等が調査結果に影響すると考えられるため、同じ都市の近郊にある２つの中学校とした。

保有教員は40歳代前半の教員歴約20年の女性である。臨免教員は50歳代後半の教員歴約30年の女性で、このクラスの担任であり、免許を保有している教科と家庭科を指導し、Ｂ校赴任前にも家庭科を指導した経験がある。

（２）調査内容および方法

調査内容の概要を表１に示す。質問内容（３）・（４）は日景[5)6)]を、質問内容（６）・（７）・（８）は土屋ら[7)]を参考にした。質問内容（３）・（４）の回答は自己評価とし、正誤等の確認は行っていない。２つの学校に「家庭科学習に関する調査」について留め置き法による質問紙調査を実施し、分析・考察した。データ解析には、統計ソフト SPSS Statistics を用いた。

表１　　調査内容

調査項目	
授業以外での経験	（１）調理経験
	（２）裁縫経験
学習効果	（３）食生活の学習内容で知っている・できること
	（４）衣生活の学習内容で知っている・できること
家庭科の授業	（５）家庭科の授業に対する意識
	（６）家庭科を学習する目標
	（７）家庭科で身に付く力
	（８）家庭科の授業に対して思うこと
	（９）家庭科学習後の実践意欲と印象的な授業
	(10)家庭科の教科としての特徴

３．結果および考察

（１）授業以外の調理や裁縫の実践経験

授業以外で調理や裁縫の実践経験を表２に示す。調理の実践経験「あり」は、対象者全員（以下、全員）、男子および女子とも保有教員指導校の方が高率となり、$x2$検定したところ男子に有意差がみられた。しかし、裁縫の実践経験は、全員および男女とも臨免教員指導校の方が高率となったが有意差はみられなかった。

表２　　授業以外での学習経験が「ある」

（単位：％）

	対象	保有教員	臨免教員	$x2$
調理	全員	60.5	37.8	
	男子	53.5	20.0	*
	女子	69.8	58.8	
裁縫	全員	33.1	40.5	
	男子	18.3	20.0	
	女子	52.8	64.7	

* ρ <0.05

（２）食・衣生活の学習内容で知っている・できること

有意差がみられた項目と中学校の学習内容である食生活７項目と衣生活６項目について「知っている」「できる」の平均割合を表３に示す。

「知っている」「できる」の平均割合は、食生活と衣生活とも、全員および男女とも保有教員指導校の方が高率となった。男女差は、保有教員指導校の「知っ

表３　食・衣生活の学習内容で知っている・できること

（単位：%）

	用語	対象	知っている			できる		
			保有教員	臨免教員	*x2*	保有教員	臨免教員	*x2*
食生活	くし形切り	全員	41.9	27.0		32.3	16.2	
		男子	38.0	25.0		25.4	5.0	***
		女子	47.2	29.4		41.5	29.4	
	輪切り	全員	87.9	89.2		83.1	75.7	
		男子	85.9	80.0		77.5	55.0	*
		女子	90.6	100.0		90.6	100.0	
	たんざく切り	全員	83.9	64.9	*	72.6	48.6	**
		男子	78.9	35.0	**	66.2	20.0	**
		女子	90.6	100.0		81.1	82.4	
	ハンバーグステーキ	全員	96.8	97.3		46.0	43.2	
		男子	97.2	95.0		43.7	30.0	
		女子	96.2	100.0		49.1	58.8	
	いりたまご	全員	80.6	40.5	***	62.9	27.0	***
		男子	78.9	30.0	***	54.9	15.0	***
		女子	83.0	52.9	*	73.6	41.2	**
	ムニエル	全員	89.5	62.2	***	50.8	10.8	***
		男子	87.3	40.0	**	40.8	0.0	***
		女子	92.5	88.2		64.2	23.5	**
	とん汁	全員	95.2	94.6		56.5	37.8	*
		男子	94.4	90.0		54.9	25.0	**
		女子	96.2	100.0		58.5	52.9	
	平均	全員	82.3	68.0		57.7	37.0	
		男子	80.1	56.4		51.9	21.4	
		女子	85.2	81.5		65.5	55.5	
衣生活	しつけ	全員	79.8	62.2	*	68.5	62.2	
		男子	76.1	40.0		63.4	40.0	
		女子	84.9	88.2		75.5	88.2	
	まち針のうち方	全員	81.5	64.9	*	74.2	64.9	
		男子	83.1	40.0	**	76.1	40.0	*
		女子	79.2	94.1		71.7	94.1	
	半返し縫い	全員	88.7	51.4	***	76.6	45.9	***
		男子	87.3	45.0	*	74.6	50.0	
		女子	90.6	58.8	*	79.2	41.2	*
	かがり縫い	全員	61.3	40.5	*	45.2	29.7	
		男子	57.7	25.0	**	42.3	20.0	**
		女子	66.0	58.8		49.1	41.2	
	まつり縫い	全員	84.7	40.5	***	72.6	27.0	***
		男子	77.5	25.0	***	66.2	20.0	***
		女子	94.3	58.8	***	81.1	35.3	**
	ミシン縫い	全員	87.1	94.6		77.4	94.6	*
		男子	83.1	95.0		73.2	90.0	*
		女子	92.5	94.1		83.0	100.0	
	平均	全員	80.5	59.0		69.1	54.1	
		男子	77.5	45.0		66.0	43.3	
		女子	84.6	75.5		73.3	66.7	

*** ρ <0.001，** ρ <0.01，* ρ <0.05

ている」をみると、食生活の平均は男子80.1%、女子85.2%からその差は5.1ポイントとなる。同様に、臨免教員指導校は25.1ポイント、「できる」は保有教員指導校13.6ポイント、臨免教員指導校34.1ポイント、衣生活の「知っている」は保有教員指導校7.1ポイント、臨免教員指導校30.5ポイント、「できる」は保有教員指導校7.3ポイント、臨免教員指導校23.4ポイントとなり、いずれも臨免教員指導校の方が大きくなった。

食生活と衣生活の各項目について男女別にみる。

１）食生活

男子では「知っている」と「できる」とも全ての項目で保有教員指導校の方が高率となった。また、臨免教員指導校の男子では「ムニエル」が「できる」と回答した者はいなかった。

女子の「知っている」では「くし形切り」「いりたまご」「ムニエル」の３項目、「できる」では「知っている」の３項目に加え「とん汁」の計４項目で保有教員指導校の方が高率だった。

有意差がみられた項目は、男子の「知っている」では「たんざく切り」「いりたまご」「ムニエル」の３項目、「できる」では「ハンバーグステーキ」を除く６項目、女子の「知っている」では「いりたまご」の１項目、「できる」では「いりたまご」「ムニエル」の２項目で、いずれも保有教員の方が有意に高くなり、臨免教員指導校の方が高率だった項目には有意差がみられなかった。また、有意差がみられた項目数は男子の方が多かった。

２）衣生活

男子では「知っている」と「できる」の「ミシン縫い」では臨免教員指導校の方が高率だったが、それ以外の５項目では保有教員指導校の方が高率となった。また、臨免教員指導校の男子は、「かがり縫い」と「まつり縫い」の「できる」割合が非常に低率だった。

女子では「知っている」と「できる」とも「まち針のうち方」と「ミシン縫い」の２項目では臨免教員指導校の方が高率だったが、それ以外の４項目では保有教員指導校の方が高率となった。

有意差がみられた項目は、男子では「知っている」「できる」とも「まち針のうち方」「かがり縫い」「まつり縫い」の３項目と、「知っている」の「半返し縫い」、女子では「知っている」「できる」とも「半返し縫い」「まつり縫い」の２項目となり、いずれも保有教員の方が有意に高くなった。また、有意差がみられた項目数は男子の方が多かった。

生活に関わる学習や実践はあまり家庭で行われなくなっている[8)9)]ことから、「知っている」「できる」の結果は学校で指導しているかどうかの指標になると考える。それを踏まえると、臨免教員指導校では、中学校の学習内容である「ムニエル」や「まつり縫い」[10)]を指導していない、あるいは身に付くまで指導していないことが推察された。

（３）家庭科に対する意識

生徒の家庭科に対する意識を表４に示す。全員でみると、両校とも同様な傾向を示し、有意差はみられなかった。

男女別にみると、保有教員指導校では数値の違いはあるが、家庭科が「好き」な生徒は男子52.1%、女子75.5%と高率になった。しかし、臨免教員指導校では女子は「好き」が82.4%と多くなったが、男子は45.0%と半数以下となり、男女で異なる傾向がみられた。$x2$検定したところ、男女とも有意差はみられなかった。

表４　　家庭科が好きか

（単位：%）

	対象	保有教員	臨免教員
好き	全員	62.1	62.2
	男子	52.1	45.0
	女子	75.5	82.4

（４）家庭科で身に付けたい力

家庭科で身に付けたいと力に関する生徒の意識を表５に示す。全員でみると、「生活に関する知識」「生活に関する技術」「快適な生活を営む力」の３項目は両校とも高率を示した。しかし、それ以外の６項目では保有教員指導校の生徒の方が高率となった。なかでも「自分の生活を見直す力」「生活の課題や問題を発見する力」「課題や問題を自分の力で解決する力」の３項目では、保有教員指導校の生徒の意識が有意に高くなった。

男女別にみると、両校の男女とも全員と同様な傾向を示し、全員と同じ３項目は高率を示したが、それ以外の６項目では男女とも保有教員指導校の生徒の方が高率となった。なかでも男子は「生活の課題や問題を発見する力」「自分の意見や考えを表現する力」の２項目、女子は「自分の生活を見直す力」「生活の課題や問題を発見する力」「課題や問題を自分の力で解決する力」の３項目では、保有教員指導校の生徒の意識が有意に高くなった。これより、臨免教員指導校の生徒は、家庭科は知識や技能を習得する教科であるという意識が強いが、保有教員指導校の生徒はそれ以外、

例えば課題解決能力なども身に付けたいと思っていることが示唆された。

表５　家庭科学習で身に付けたいと思うこと

（単位：%）

	対象	保有教員	臨免教員	$x2$
生活に関する知識	全員	86.3	81.1	
	男子	90.1	75.0	
	女子	81.1	88.2	
生活に関する技術	全員	79.8	83.8	
	男子	80.3	90.0	
	女子	79.2	76.5	
自分の生活を見直す力	全員	51.6	24.3	*
	男子	54.9	35.0	
	女子	47.2	11.8	**
根拠を持ち判断する力	全員	30.6	18.9	
	男子	33.8	20.0	
	女子	26.4	17.6	
生活の課題や問題を発見する力	全員	47.6	24.3	*
	男子	50.7	30.0	*
	女子	43.4	17.6	**
課題や問題を自分の力で解決する力	全員	46.0	24.3	*
	男子	46.5	30.0	
	女子	45.3	17.6	**
自分の意見や考えを表現する力	全員	30.6	18.9	
	男子	32.4	15.0	*
	女子	28.3	23.5	
生活について考える力	全員	55.6	40.5	
	男子	56.3	45.0	
	女子	54.7	35.3	
快適な生活を営む力	全員	78.2	78.4	
	男子	80.3	75.0	
	女子	75.5	82.4	

** ρ <0.01，* ρ <0.05

（５）家庭科の授業に対して思うこと

家庭科の授業に対して思うことを表６に示す。

全員でみると、「生活する上で役に立つ」と「実習があって面白い」の２項目では、両校とも80％以上の高率を示したが、それ以外の４項目では低率となった。また、「生活する上で役に立つ」は臨免教員指導校の生徒の方が高率となったが、他の５項目では保有教員指導校の方が高率となった。$x2$検定したところ、「自分の意見や考えを表現できる」「他の人と意見を交換する場がある」では有意差がみられた。

男女別にみても全員と同様な傾向がみられ、２項目では両校の男女とも高率を示した。また、「生活する上で役に立つ」は臨免教員指導校の男女の方が高率となったが、それ以外の５項目では保有教員指導校の方が高率となった。$x2$検定したところ、男子では全員と同じ２項目に、女子ではそれらの他に「学習内容が理解しやすい」を加えた計３項目に有意差がみられ、保有教員指導校の生徒の意識の方が有意に高くなった。

これより、保有教員は授業のなかに自分の意見や考えを発言させたり、他の人と意見交換する場を設けていることがわかったが、臨免教員は実習を活用した知識や技能の習得に力を入れてはいるが、生徒間の意見交換のような場面は少ないことがうかがえた。

表６　家庭科の授業に対して思うこと

（単位：%）

	対象	保有教員	臨免教員	$\chi 2$
生活する上で役に立つ	全員	83.1	94.6	
	男子	85.9	95.0	
	女子	79.2	94.1	
実習があって面白い	全員	91.9	83.8	
	男子	90.1	80.0	
	女子	94.3	88.2	
グループでの活動があり面白い	全員	61.3	51.4	
	男子	59.2	50.0	
	女子	64.2	52.9	
自分の意見や考えを表現できる	全員	25.0	5.4	**
	男子	32.4	5.0	**
	女子	15.1	5.9	*
他の人と意見を交換する場がある	全員	25.0	8.1	*
	男子	31.0	10.0	*
	女子	17.0	5.9	*
学習内容が理解しやすい	全員	46.8	27.0	
	男子	46.5	35.0	
	女子	47.2	17.6	*

** ρ <0.01，* ρ <0.05

（６）印象に残っている授業

印象に残っている授業が「ある」割合を表７に示す。両校の全員および男女とも臨免教員指導校の方が若干高率であるものの、約半数程度が「ある」と回答した。$x2$検定したところ、いずれにも有意差はみられなかった。

表７　印象に残っている授業はあるか

（単位：%）

	対象	保有教員	臨免教員
ある	全員	50.8	54.1
	男子	49.3	50.0
	女子	52.8	58.8

そこで、印象に残った授業を記載させたところ、保有教員指導校では62名（50.0％，「ある」と回答した者は男女合わせて63名）が、臨免教員指導校では20名（54.1％，同男女合わせて20名）が記述したが有意な差は認められなかった。

記述内容をみると、保有教員指導校では「羊かんの食べ比べ」「こぎん刺し」「古着からクッション作り」

のように消費者教育を取り入れた食生活、地域の衣生活文化、環境への配慮など多岐にわたる記述がみられたが、臨免教員指導校ではポテトサラダやぬいぐるみ作りなどの実習に関する記述しかみられず、上記のように実習に力をいれていることが再確認された。また、臨免教員指導校の生徒は、現行学習指導要領[10]には当てはまらない内容（例えば、きんぴらごぼうの調理）が記載されており、臨免教員は学習指導要領を把握していないことがうかがえた。

（７）家庭科の教科としての特徴

家庭科の教科としての特徴をどのようにとらえているかを表８に示す。

全員でみると、家庭科には他の教科にないよいところが「ある」が、臨免教員指導校の方が高率となった。しかし、有意な差はみられなかった。

男女別にみると、男子では臨免教員指導校の方が「ある」は高率となったが、女子では保有教員指導校の方が高率となった。しかし、$x2$検定の結果、いずれの場合も有意差はみられなかった。

表８　　他教科にないよいところはあるか

（単位：％）

	対象	保有教員	臨免教員
ある	全員	70.2	73.0
	男子	63.4	70.0
	女子	79.2	76.5

次に、「ある」と回答した生徒にその理由を記入させ、類似内容をまとめて５つのカテゴリーとし、それを構造化し、表９に示す。

「楽しい・料理が食べられる・グループ活動がある・実習がある」といった記述を「家庭科への肯定感」とし、これが家庭科学習の基盤になると考えた。次に、「生活上のことが学べる・調理ができる」といった学習内容や手段に関する内容を「生活技術の学習・習得」とした。「グループ内の協力」のような「友人との学び合い」が「学習した技術が身に付く・できることが増える」のように「生活技術のスキルアップ」させ、それにより家庭科は「役に立つ」につながると考えた。

臨免教員指導校の生徒の方が高率のカテゴリーは、「生活技術の学習」（８名，29.6%）、「生活技術のスキルアップ」（４名，14.8%）の２つだった。なかでもサブカテゴリーの「生活上のことが学べる」「学習したことが身に付く」は男女とも高率だった。

一方、保有教員指導校の生徒は、「家庭科への肯定感」（32名，36.8%）、「友人との学び合い」（12名，13.8%）、「役に立つ」（25名，28.7%）のカテゴリーが高率となった。サブカテゴリーの「楽しい」、「グループ内の協力」「今役に立つ」「将来役に立つ」は顕著に高率で、なかでも「将来役に立つ」を男子２名が記述したことは、河村[11]が生活にかかる技能・技術は「今ここで」必要なものだけでなく、「将来に向けて」長く応用性をもって使っていくものがあると述べている

表９　　「家庭科の特徴」とその構造化

（単位：名）

カテゴリー	サブカテゴリー	保有教員			臨免教員		
		計	男子	女子	計	男子	女子
役に立つ ↑	将来役に立つ	25 (28.7%)	2 (4.4%)	4 (9.5%)	5 (18.5%)	0 (0.0%)	1 (7.7%)
	今役に立つ		7 (15.6%)	12 (28.6%)		1 (7.1%)	3 (23.1%)
生活技術のスキルアップ	学習したことが身に付く	8 (9.2%)	2 (4.4%)	6 (14.3%)	4 (14.8%)	1 (7.1%)	3 (23.1%)
友人との学び合い ↑	グループ内の協力	12 (13.8%)	5 (11.1%)	7 (16.7%)	1 (3.7%)	0 (0.0%)	1 (7.7%)
生活技術の学習・習得 ↑	調理ができる	11 (12.6%)	3 (6.7%)	2 (4.8%)	8 (29.6%)	2 (14.3%)	0 (0.0%)
	生活上のことが学べる		5 (11.1%)	1 (2.4%)		4 (28.6%)	2 (15.4%)
家庭科への肯定感	グループ活動・実習がある	32 (36.8%)	5 (11.1%)	6 (14.3%)	7 (25.9%)	1 (7.1%)	2 (15.4%)
	食べられる		8 (17.8%)	0 (0.0%)		2 (14.3%)	0 (0.0%)
学習の基盤	楽しい		8 (17.8%)	5 (11.9%)		2 (14.3%)	0 (0.0%)

ように、特記すべきことといえる。これより、臨免教員指導校の生徒は生活技術の学習やスキルアップが家庭科の特徴と思っているが、保有教員指導校の生徒は今や将来役に立つことを家庭科の特徴ととらえていることが示唆された。

男女別にみると、両校とも男子は「家庭科への肯定感」「生活技術の学習」で高く、女子は「生活技術のスキルアップ」「友人との学び合い」「役に立つ」で高い傾向がみられた。これより、男子は生活技術の学習が家庭科の特徴と思っているが、女子は生活技術のスキルアップや役に立つことを家庭科の特徴ととらえており、これは女子の方が生活に関する知識や技術の習得が高いことが背景にあると思われる。

（８）家庭科を学習する目標

家庭科を学習する意義に関する生徒の意識を表10に示す。

全員でみると、「生活に関する知識を習得するため」「生活に関する技術を習得するため」「快適な生活を営むことができるようにするため」の３つの項目では、両校とも80％以上の高率を示した。しかし、それ以外の６項目では、保有教員指導校の生徒の意識が高く、「根拠を持ち判断できるようにするため」「生活の課題や問題を解決できるようにするため」「課題や問題を自分の力で解決できるようにするため」「自分の意見や考えを発表できるようにするため」の４項目では保有教員指導校の生徒の方が有意に高くなった。

男女別にみても全員と同様な傾向を示したが、男子では「根拠を持ち判断できるようにするため」「自分の意見や考えを発表できるようにするため」の２項目で、女子では高率になった３項目を除く全ての項目で保有教員指導校の生徒の意識が有意に高くなった。これより、臨免教員指導校の生徒は、家庭科を知識や技能を習得する教科と捉えているが、保有教員指導校の

表10　家庭科を学習する目標

（単位：名）

家庭科を学習する目標	対象者全員の回答割合				「役に立つ」と回答した生徒 *1	
	対象	保有教員	臨免教員	χ2	保有教員	臨免教員
①生活に関する知識を習得するため	全員	95.2	97.3		76.0（19名）	80.0（4名）
	男子	95.8	95.0			
	女子	94.3	100.0			
②生活に関する技術を習得するため	全員	92.7	86.5		80.0（20名）	100.0（5名）
	男子	91.5	90.0			
	女子	94.3	82.4			
③自分の生活を見直すため	全員	58.9	24.3		52.0（13名）	20.0（1名）
	男子	56.3	25.0			
	女子	62.3	23.5	*		
④根拠を持ち判断できるようにするため	全員	31.5	10.8	*	28.0（7名）	0.0（0名）
	男子	35.2	15.0	*		
	女子	26.4	5.9	***		
⑤生活の課題や問題を発見できるようにするため	全員	46.8	24.3	*	60.0（15名）	0.0（0名）
	男子	47.9	25.0			
	女子	45.3	23.5	*		
⑥課題や問題を自分の力で解決できるようにするため	全員	58.1	37.8	*	80.0（20名）	20.0（1名）
	男子	63.4	55.0			
	女子	50.9	17.6	*		
⑦自分の意見や考えを発表できるようにするため	全員	29.0	10.8	*	32.0（8名）	0.0（0名）
	男子	33.8	15.0	*		
	女子	22.6	5.9	***		
⑧生活について考えられるようにするため	全員	72.6	37.8		64.0（16名）	20.0（1名）
	男子	66.2	40.0			
	女子	81.1	35.3	*		
⑨快適な生活を営むことができるようにするため	全員	87.9	89.2		84.0（21名）	80.0（4名）
	男子	85.9	85.0			
	女子	90.6	94.1			

*1：表９で「役に立つ」と回答した保有教員指導校25名、免許外教員指導校5名の生徒が各項目に回答した割合　　*** ρ <0.001，* ρ <0.05

生徒は家庭科を課題解決や意思決定の力を身に付ける教科と捉えているといえる。

（９）「役に立つ」と家庭科を学習する目標との関連

家庭科学習は「役に立つ」ことが重要である[12)13)]ことから、「役に立つ」と記述していた生徒が家庭科の学習目標をどのようにとらえているかをみるために、学習目標のなかで有意差がみられた６項目（表10③～⑧）の回答数と割合を表10に追記する。なお、「役に立つ」と記述した生徒数は保有教員指導校25名、臨免教員指導校５名と少なかったため、この表では性別に分けずに記載する。

臨免教員指導校の生徒は、①「知識の習得」、②「技術の習得」および⑨「快適な生活を営む」に集中し、それ以外の項目では③「生活の見直し」、⑥「課題解決」、⑧「生活について考える」に各１名が回答していた。この結果は、臨免教員指導校の生徒は、家庭科は知識や技能を習得する教科であるという意識が強い（表５）ことを追認した。

一方保有教員指導校の生徒も、①「知識の習得」、②「技術の習得」および⑨「快適な生活を営む」の回答は多く、この３項目については臨免教員指導校の生徒と同様な傾向を示した。しかし、それ以外の６項目では保有教員指導校の生徒の方が顕著に高率となり、臨免教員指導校の生徒が回答しなかった④「根拠を持ち判断できる」、⑤「生活の課題や発見」、⑦「自分の意見や考えを発表」の３項目でも複数人の回答がみられた。これより、保有教員指導校の生徒は幅広い視点で「役に立つ」と捉えていることが示唆された。

以上の結果から、家庭科教員免許の有無は、生徒に学習効果や家庭科観に影響を与えていると推察される。

臨免教員指導校の生徒は家庭科の目標を、目標達成のための手段である知識や技能を習得する教科であると捉えているが、保有教員指導校の生徒はその意義も認めつつ課題解決的な学習を通して今の生活はもちろん将来の生活をも考える教科であると捉えていることが示唆された。

また、食生活や衣生活の学習内容では、保有教員指導校の生徒の方が「知っている」「できる」結果になり、臨免教員指導校の生徒は「まつり縫い」のような中学校の指導内容の「できる」割合は低く、身に付いていないことがわかった。家庭科を指導している教師を対象とした調査では、臨免教員の家庭科指導には、技術指導能力、専門的知識、指導方法の工夫や配慮に欠けることや、家庭科教育の意義や重要性を生徒に理解させることができないなどの問題点がある[3)14)]と指摘されており、今回の結果は、教師が考えているこれらの問題点がそのまま生徒の実態として明らかになったといえる。

この調査が一事例であることを踏まえても、この結果は生徒の学習権が保障されていないことを意味しており大きな問題である。同時に、臨免教員の存在は家庭科の存在意義を揺るがしかねないといえる。つまり、臨免教員であることを知っている者は限られた学校関係者のみで、生徒、保護者や地域社会はそのようなことを知らされていない。そのため生活における実践が「できない／うまくできない」現実は、受験教科ではないことも相まって家庭科履修に厳しい対応となって表れていると推察される。そこで、臨免教員に対しては教育委員会等が家庭科の意義や知識・技能指導などの研修を充実させることなど、指導にあたってのサポート体制の整備[15)]などが早急に必要と考える。抜本的には、教員免許制度の根幹を揺るがすような臨免教員をなくすこと[2)]が切望される。

本調査は保有教員指導校と臨免教員指導校を対象としたが、それぞれ１校の実施であり、この結果をもって臨免教員指導校の生徒の実態とすることには慎重さが必要と考える。しかし、臨免教員指導校の生徒を対象に調査を実施することは、これからも困難が予想される。そのようなことから、一事例ではあるが、今後の家庭科教育発展に資する研究と考える。

４．まとめ

臨免教員の指導は学習者にどのような影響があるかを検討するために、保有教員と臨免教員に指導されている学習者を対象に学習効果や家庭科観などについて調査し、両校の生徒の実態を比較した。得られた結果は以下のとおりである。

１）授業以外での調理経験・裁縫経験、家庭科の授業への好感は、両校とも同様な傾向を示し、有意差はみられなかった。

２）有意差がみられた学習内容は、全て保有教員指導校の生徒の方が優位であり、臨免教員指導校の生徒よりも知識や技術が身に付いていた。

３）家庭科学習の目標は、両校の生徒とも「生活に関する知識や技術の習得」などが高率となった。また「根拠をもち判断」「自分の意見や考えを発表」など

は保有教員指導校の生徒の方が有意に高率となった。臨免教員指導校の生徒は、家庭科を知識や技能を習得する教科と捉えているが、保有教員指導校の生徒は家庭科を課題解決や意思決定の力を身に付ける教科と捉えていることがわかった。

4）家庭科の他教科にないよいところでは、保有教員指導校の生徒の記述は「家庭科への肯定感」「友人との学び合い」「役に立つ」が、臨免教員指導校の生徒は「生活技術の学習」「生活技術のスキルアップ」のカテゴリーが高率となり、保有教員指導校の生徒は役に立つことを家庭科の特徴と捉えていることが示唆された。

以上のことより、臨免教員に指導されている生徒の学習効果や家庭科観に影響がみられたことは、教科の免許状取得者が担当する意義を生徒の実態から明らかにしたといえる。また、家庭科は家庭生活を中心に学習する教科のため、生徒の学習効果や家庭科観は生徒の将来の生活に影響を与えるだけでなく、次世代への影響も懸念されることから、無視できない問題である。学校現場では、担当授業時数の調整のために臨免教員による指導が行われているが、このことを考えると臨免教員の存在は容認できない。

一方、臨免教員が存在する現実を踏まえるならば、生徒への影響をなくす、あるいは最小限にするために、臨免教員に対するサポート体制の整備等や教員免許制度そのものの改善が必要と考える。

家庭科をはじめ、担当教科の教員免許の有無に関する問題を検討することは、直接には教科指導を受ける生徒に対して学習を通して自己肯定感や有用感の向上などに貢献し、それが反映して教科指導者である教師の専門性や職能性などの向上につながる等、教員養成の根幹に関わるといえる。教育をめぐる問題が複雑化、深刻化する現代であるからこそ、事例研究をもとに教員免許取得者が指導する意義について実証的に明らかにしながら、家庭科の課題解決をめざしていきたい。

謝辞

本調査にご協力くださった中学生の皆さんと先生方に感謝申し上げます。

引用文献

1）菊地るみ子．高知県の実態からみた家庭科の問題点．日本家庭科教育学会誌．1983．26(2)，51-56
2）高木直，赤塚朋子，志村結美，中西雪夫．課題研究報告中学校家庭科教員全国実態調査報告．日本家庭科教育学会誌．2013，56(3)，161-165　註47都道府県中27都道府県から回答が得られたが、その回答は都道府県全体を調査しているのではなく、一部の調査地の結果である。
3）浜島京子．中学校家庭科免許外教員の実態ー全国の状況ー．福島大学教育実践研究紀要．1990，17，55-64
4）浜島京子．中学校家庭科担当者における免許外教員の実態と問題．福島大学教育学部論集教育・心理部門．1992，52，21-31
5）日景弥生，鳴海多恵子．被服製作に関する知識や技能の定着における高校家庭科男女必修の影響：男女必修以前と必修後約20年経過時点での調査結果の比較を通して．日本家庭科教育学会誌．2011，54(1)，12-21
6）日景弥生．調理に関する知識や技能の定着における高校家庭科男女必修の影響：男女必修以前と必修後約20年経過時点での調査結果の比較を通して．日本家庭科教育学会誌．2013，56(1)，23-34
7）土屋善和，堀内かおる．高等学校定時制課程における生徒の家庭科観：全日制課程との比較から．日本家庭科教育学会誌．2012，55(1)，34-42
8）日本家政学会．日本人の生活ー50年の軌跡と21世紀への展望ー．建帛社，1998
9）日本家庭科教育学会．児童・生徒の家庭生活の意識・実態と家庭科カリキュラムの構築ー家庭生活についての全国調査の結果ー．2002
10）文部科学省．中学校学習指導要領技術・家庭編．教育図書，2008
11）河村美穂．技能・技術のとらえ直しと「生活スキル」．生活をつくる家庭科第１巻．日本家庭科教育学会（編）．ドメス出版，2007，28-43
12）長澤由喜子，中屋紀子，日景弥生，高木直，西内みなみ，滝山桂子．高等学校必修家庭科履修者の感想文分析ー新構想研究東北地区のデータから（第２報）ー調理実習に関する記述と学習意欲の関連ー．日本家庭科教育学会誌．2001，44(1)，52-63
13）日景弥生，山田桂子．高等学校家庭科の調理実習－授業実践後の「楽しさ感」と「役立ち感」の調査－．弘前大学教育学部紀要．2002，第87号，173-180
14）小高さほみ，佐藤ゆかり．中学校技術・家庭科の家庭分野担当教師の授業実践上の困難．日本家政学会第66回大会研究発表要旨集，2014，63
15）葛川幸恵，堀内かおる．家庭科教師の自発的研修組織におけるニーズと効果：学び合いを支援する場作りの試み．日本家庭科教育学会第55回大会研究発表要旨集，2012，108-109

（2015．7．31 受理）